【福島大学むらの大学アーカイブ 4】【川内 Chapter 4】

川内村への帰還と今後の展望

小松屋旅館オーナー　井出茂さん

インタビュー日時：2023 年 10 月 18 日

インタビュー場所：小松屋旅館

聞き手：鈴木順斗、馬渕友悟、立石茉穂、田村真大、鈴木敦己

プロフィール

1955 年 5 月 19 日生まれ（インタビュー時 68 歳）。県立双葉高等学校を卒業後、民間企業に勤め、1993 年より川内村に戻り、1994 年から福島県福祉事業協会に勤め、2002 年に家業の小松屋旅館を継ぐ。2001 年に「げんきな川内の会」を発足し、2003 年から現在まで村会議員・商工会長・保護司を務める。また、観光協会の会長も務めている。

１．震災前の川内村での生活

ーお名前とご出身を お伺いしてもよろしいでしょうか。
井出：はい。井出茂です。出身は川内村です。昭和 30 年 5 月 19 日に生まれました。高等学校は県立双葉高等学校。 陸上部なんかをやってました。川内村の商工会の会長になった時にね、三つのキーワードっていうのを作りました。
一つは健康、それから郷土料理、もう一つは地域資源っていうですね、その三つを回しながら地域をつくっていこうということでやっていたんですね。 その健康の一つには、そこにポールありますけども、ノルディックウォーキングをやりながら健康増進したいよねっていうことで、僕もノルディックウォーキングのベーシックインストラクターの資格は持ってます。いま大分大学と連携をして、僕らがやっていたのはアグレッシブウォークっていって、ポールを体の横に突くんですね。大分大学がやってんのはディフェンシブノルディックウォークっていって前に突くんです、こういうふう に。ディフェンシブですから、前に突いてやるっていうやり方を、新たに川内村の中で広げていきましょうっていうことで、いま展開をしているところです。
その関係でね、僕は昔から釣りは大好きで、渓流釣りは、遠くは相馬の宇田川とか、そういった所まで行って釣りをやってました。ちっちゃい時から釣りはね、目の前が川なんで、釣りやったり、すくいをやったり、ガラス箱でカジカを突いたりってね。もうちっちゃい時は、夏休みになると夕方まで帰ってこなかった。

ーずっと外で？
井出：うん。ずっと外で遊んでいて、その代わり勉強もしませんでしたよね。

ー宿題はいいやって思って？
井出：本当にしなかった、勉強は。子どもながらにライターとか持って行って、火を熾して、釣った魚とか突いた魚を刺して焼いて食ったり。

ーライターで？
井出：うん。

ーだって、ライターで火つけて、まき起こしてんだから。
井出：そうそう。まあ本当にね、やっちゃいけないことばっかりしてた。

ー川内のお生まれはどちらなんですか。
井出：生まれ、ここ。

ーそうか。ここで、ここで、ここか。
井出：そうそう。

ーここで、ここ？
井出：ここで、ここで、ここよ。

ー高校に通われてる時は？
井出：高校は下宿。

ー向こうまで行って？
井出：そう、下宿をして。

ー双葉町内にですか。
井出：そうですね。井戸川さんという所。 高校の同級生のうちに下宿してたんですね。 同級生。下宿屋だったんで、いろんなのいましたよ、たくさん。

ーなかなか楽しいですね、それはそれで。
井出：いや、まあ楽しいけど、勉強できねえよな。

ーいやいや。
井出：たまり場になっちゃうんだよね。

ー高校生ですものね。
井出：バンカラね。双高はね、バンカラで。ベニヤ板１枚で、本当に薄いベニヤ板、あるでしょ？ あれ１枚で仕切られてる部屋なので、壁に寄りかかると、そいつの背中の跡がこういうふうに。思い切り蹴飛ばしてやる。寄っかかんじゃねえよ、みたいな。川内村って、僕らが生まれた時って実は寒くてゴキブリなんかいなかったの。高校で下宿した時に初めてゴキブリを見たの。それは、問題はそこなのよ。ゴキブリを見たことがないので、ゴキブリが何者かも分からない。気持ち悪くも何ともないわけ。

ーそれは、はい。なるほど。
井出：思うでしょ？

ーそうですね。
井出：それ、認識するからそういうふうになるんであって、ゴキブリ捕まえて、でっかいカブトムシだなって。ほんで「いや、それカブトムシじゃないから。ゴキブリっていうんだよ」。えーっ。初めて。
ゴキブリって名前聞いて、「えー」だよ。それまではとっ捕まえて、でっかいカブトムシって。しかも双葉の、こんなでかいのよな。ほんで、びゅーんって飛んでいく。飛ぶんだよ、あいつら。ばーって。食堂がこのぐらいの大きさでさ、あるわけ。僕ら、部活やってくるから帰りが遅いの。真っ暗な、電気ついてなくて。電気バチってつけるとさ、ゴキブリが、わーっと逃げてくんだよね。考えられないだろう？ 風呂もさ、自分たちで薪で炊いて入る風呂だったんだ。だから、野球部より遅く帰ってくると大変なことに

なるのよ。泥。泥水。お風呂の中が泥水なの。野球部ってどろどろになって帰ってくるでしょ。俺ら、泥水の中に入るようなもんだから。いや、もう楽しかったよ。すごい楽しかった。だから、そんなんで高校をね、行きました。

ー高校に行く前、小学校、中学校はこのおうちからずっと通われてた？
井出：そう。すぐ近くだったから。

ー当時の家族構成をお聞きしてよろしいですか。
井出：当時は、両親と、それから父親のきょうだい。お姉ちゃん。おばちゃん。おばさんだね。おばさんもいて。僕は 4 人兄弟なので、7 人。

ー茂さん、何番目なんですか。
井出：僕は一番下。末っ子なんだよね。末っ子がうち取っちゃった、みたいなね。

ー確かに珍しいというか、なかなか。
井出：うん、当時はね。うちの、僕の兄弟 3 人。上も、上、お姉ちゃんが 2 人。お姉ちゃん 2 人も、もう大学行っちゃった。兄貴も大学行っちゃった。兄貴はもう 3 人とも公務員なったんで。

ーそうなんですね。それは村役場じゃなくてって話ですよね？
井出：うん。兄貴はいわきの市役所行った。大学行って、いわきの市役所行って。上の 2 人は学校の先生になった。

ーなるほど、じゃあ、もう。
井出：僕は民間の企業に勤めてたので、一番ね、帰って来いって言われやすくて。帰って来いよ、みたいなね。こっちはいいよ、みたいな。何もよくねえんだけどさ。そんなんで縁があってね、こっち戻って来て。その時に、戻って来た時は子どもが 2 人。今の長男と長女がいて、川内村に戻ってきました。
川内村に戻って来てから、3 番目と 4 番目が。双子なんだけどね、双子の男の子と女の子ができて、4 人子どもがいるってこと。その長男はここの蕎麦酒房天山っていう、天山の店長やってまして、長女はリヴィエールっていうパン屋をやってるんですね。下 2 人はいま関東のほうにいて、勤めをしているところですね。さっき岐阜にね、3 年ぐらい出向してた。

ーそうですか。
井出：各務原。あそこに川重のあれがあるでしょ？川重の飛行場。各務原の飛行場があって、川重があって、修理とかなんかするじゃないですか。あそこに出向してた。3 年ぐらい。

ーじゃあ岐阜、結構家からも近いので。
井出：そうなのよ。今は横浜の工場のほうにね、次男のほうが。

ー神奈川。
井出：神奈川ね。そう、いるんだよ。

ー戻ってきたのって何歳ごろの話ですか。
井出：戻って来たのが 38 の時ですかね。

ーじゃあ高校出て、そこから 20 年間は村の外でお勤めされていた？
井出：うん、そうそう。大学行って、それから勤めをして、ですね。それから戻ってきましたね。やっぱり子どもを育てるんだったら川内村がいいなって思っていたの。

ー当時、お子さんって何歳だったんですか。帰った時。
井出：上がね、上が 4 歳に下が 2 歳だったかな。戻って来て、仕事がなかったの。

ーあれ？ ここは継いだわけじゃないんですか、すぐに。
井出：すぐには継いでないんだよ。仕事がなくて職安に行ったの。職安に行ったら、原発の作業員だったら仕事あるけど、それ以外はねえなって言われて。ちょっと事務系のね、仕事をしたいなと思っていたの。というのは、僕はずっと営業の仕事に携わっていて、しかも人間が一生のうちで一番高い買い物をするような不動産関係の、建設会社のね、そういう仕事をしてて、非常に厳しい労働環境というか、営業だったんで、かなり厳しく数字の管理をされてて、やっぱり精神的にもちょっと、かなり厳しい状況になっていたのね。だから、ちょっと事務の仕事をしたいなと思って、その話を素直にその職安の人に言ったら、きみね、ここね、仕事ないよ。チロリン村だからね。ここは。

ーチロリン村？
井出：知らない？『チロリン村とくるみの木』っていう NHK の子ども向けの人形劇の番組があったの。チロリン村って、本当にちっちゃい村を舞台にした、今でいうね、あそこ。大槌にあるさ、島あるじゃない。

ーはい。ひょっこりひょうたん島。
井出：ひょっこりひょうたん島。それと似たようなことを言ってるわけ。

ーはいはい。分かりました。私は世代なんで分かりましたけど、まだこの子たちはもう一個下なんで。
井出：まあ、とにかく田舎だっていうことよ。田舎で仕事ないよっていう。原発の仕事だってあるけど、事務仕事なんか全くねえよって言われて。1 年間、僕は仕事に就かずに毎日、こんなこと言うと「本当かい？」って言われるかも分かんないけど、『浮浪雲』って知ってる？ ジョージ秋山が描いてる漫画。『浮浪雲』。

ー『浮浪雲』。
井出：遊び人の漫画よ。井出：要するに毎日釣り竿を持って、でんでんでんでんとかって言って釣りやっ

て、女の子見ると、かわいいね、お茶しよう、みたいな。時代劇の中でだよ。本当に僕はそういう生活してたの、1年間。毎日釣りやってたの。

－1年間。

井出：毎日釣り。つらいよ、これ。釣り好きな人はいいだろうって思うだろう？ でも、毎日釣りだよ。仕事があって、対局として遊びがあるっていうんだったら、これ楽しみなのよ。とにかく釣りしかない。たまに山に行ってキノコ採りみたいな。だから、地域の人には「見ろ、あれ。また釣り竿持って魚釣りだわ」みたいなこと言われてさ。釣りしてるとさ、「おい、そこじゃ釣っちゃ駄目だぞ」みたいなこと言われてさ。「なんで？」とかって言って。そこ禁猟区だろう、みたいに言われてさ。いや、調べて来てるから禁猟区じゃないはずですよ、みたいな。こんなやりとりを地域の人としてて。そうこうしてるうちに、僕は福島県福祉事業協会っていう、法人なんですけども、たぶん知ってると思うけども、東洋学園とか東洋育成園とか原町共生授産園とか原町学園とか、福島県では一番大きい福祉法人の試験を受けたのね。何とか、コネもあってそこに勤めることができた。

－川内村にもあったんですか。富岡まで出た？

井出：富岡に東洋育成園っていう所があってね。そこで僕は勤めていて、通信教育で資格を取ったの。資格を取って、今度、川内村にあぶくま厚生園っていう精神薄弱者の更生施設を造るということで、僕がその建物を建てるための事務の一切を任されて、補助金の申請から、申請、進捗状況の報告から何から、ほとんど 1 人でそこをやらさせていただいて、あぶくま厚生園ができたの。で、あぶくま厚生園ができたんですけども、7年目にちょうどおふくろが体の調子があんまりよくないっていうんでね、ここでやってたんですけども、うちの家内とうちのおふくろとやってたんですけども、調子がよくないっていうんで、じゃあ僕が入ろうかっていうことで、1 年間割烹を、富岡の駅前にある割烹魚八ってあるんですけども、割烹魚八に1年間、見習いに行ったの。何をやったかって、午前中は弁当を作って第一原発に配達。第一原発、第二原発に配達した。1500 個ぐらい作ってたからね、弁当をね。おばちゃん方と一緒に、おばちゃんに怒られながら。何やってんの、なんて怒られて、すんごく面白くなくて。毎日弁当詰めばっかりなの、午前中。午後は割烹に上がって、料理を教えてもらえるんですけども、教えてもらうんだけども、それもなかなか厳しい親方で結構大変だったんだけども、転機が訪れたわけ、そこで。やりたくねえなと思っていたんだけども、なんかね、急に、どうせこんなに嫌だな、嫌だって思ってんだったら、楽しくやったほうがいいよなっていうふうに思って。じゃあ、弁当のメニューを全部盗んでやれと思って。弁当のメニューをもう事細かくノートに書いて、きょうは何が入ってたかとかね、そんなこと書いて。割烹で習ったものも全部メモして。仕出しがあるじゃないですか、法事とかなんかの。法事とかなんかの仕出しも全部メモして、1年後に僕はここに入ったわけ。法事の仕出しとか弁当とか、やり始まったら結構今までにねえような物を作るわけだから、評判が評判呼んで、すんごい忙しくなっちゃった。すごかった、本当に。ちょうどそのころって、いま鉄塔、大きい鉄塔あるでしょう？ 50 万ボルトと 100 万ボルトの鉄塔工事も同時に入ってきたの、川内村。川内村が好景気に沸いたの、そのころ。ちょうどよかったんだな。

－時期も時期だったんですね。

井出：そう、時期も時期。結構大変だったけど、その時に双子が生まれたりなんかしな

がら、やってましたね。ちょっと前後するんだけども、その前に、実は川内村はミサワホームが入ってきて、ゴルフ場を造るっていう話になったのよ。ゴルフ場ね。あのころ、ゴルフ場って農薬たくさん使うんで、川が汚染されるっていう、これはもう常識だったの。食農学類だから、これからそういう勉強もするだろうけど、これまずいよねと。釣り大好きなのにさ、そんなことやられちゃ困るよっていうんで、ゴルフ場の反対運動を始まったの。うちは親戚が少ないので、そういうことをやってもまわりから言う人がいなかったの。僕のうちはおやじを早く、僕は早く亡くしたので、要するにおふくろもそんなに、いや、そういうことやめろよっては言わないわけよ。ただ、迷惑を被ったのは子どもたち。あいつのおやじよ、ゴルフ場反対運動なんかしやがって、みたいなね。ゴルフ場できれば、みんなあそこで働けたのに。働いたり、賠償金で屋根直したりできるのに、まったく、おやじ反対してるからさっていうふうな話で、子どもたちはバッシングを受けたんだな。でもね、最後はミサワホーム撤退していきましたからね。

ーなるほど。 反対が実を結んだ？
井出：反対したから撤退したかどうかは、それはちょっと分かんないけど、とにかく月に 2 回ぐらいチラシを出してた、毎回。チラシを出して、こういう理由で反対だよっていう。これはもう守んなくちゃいけない。川内村の自然守るためにも、これ反対運動しなくちゃ駄目だっていうのはね。そんなことをして、ミサワホーム撤退していった。そういう流れの中で、僕は村会議員の選挙に出馬して。ちょっと変えなくちゃいけない ところは変えなくちゃいけないよねっていうようなね、ところ。それから地域づくりもそういったことと連動して、自然を守るっていうこと。それから交流人口を拡大させなくちゃいけないっていうこと。
それから特産品を作って、その特産品を売ることが目的でもあるけども、それを媒介として川内村を PR したいっていうようなね、ところがあって、実は元気な川内を創る会っていう会をつくりました。 それは何をやったかっていうと、カエルの学校っていうね、事業を、プロジェクトを やったの。それは三つの柱からなってた。一つはキノコの勉強会。川内っていうとキノ コっていうね。それから特産品開発、それから都市農村の交流事業。この三つの柱をやっ たわけ。うしろのそこにね、十六って書いてあるけど、あれ「イザヨイ」って読むんだ よ。十六夜って書いて。

ー十六夜。 棚の本ね。
井出：そう。もう一つは天山十三夜っていうね、古代米を使ったお酒を造ったの。十三 夜と十六夜。震災の時に、実は十五夜って書いて満月って読ませる大吟醸がリリースされ るはずだったの。これは十三夜、十五夜、十六夜。日本のお月見の文化なのよ、これ。こ の三つで完結させようっていうことで。原発事故があって、それがかなわなかった。それ から数年後っていうか、そうなの。つい最近だよね。『歸宴（かえるのうたげ)』ってで きたでしょ。

ーうん、出ましたね。
井出：きみらの先輩と一緒に、本田さんという方がね、プロジェクトリーダーでやった んだけども、その時のネーミング。福島大学の組織票に負けたの、俺は。

ー満月が。

井出：満月じゃなくて、十三夜にしたかったの。十三夜ってなんでかっていうと、エネ ルギーが満ち溢れるさまなのよ。十五夜に対して十三夜。

ー本当ですね。満ちていく。

井出：そう。満ちていくっていうね。それは天山文庫の池が十三夜の池っていうの、あ れ。あの池に草野心平は、満月を浮かぶさまを見て悦に入ってたわけよ。十三夜の池に十 五夜が映ってるよねって言って喜んでる。で、僕は十三夜にしたかった。ところが負けた のよ。福島大学の学生諸君に。

ー学生は意味を知ってて投票したんですかね、ちゃんとね。

井出：どうだろうね。でね、特産品開発は、その三つの十三夜、十五夜、満月、十六夜っていうね、三つのお酒を造りたかった。都市農村の交流事業は田植え、それから稲刈り、そ
してソバの種まきとソバの収穫。で、収穫祭をして、そば、餅をついたり、そばを作った
りして、都市から、東京から来た人たちと交流事業をしていくということですね。
あとはキノコの勉強会は毎月一回、冬も含めて毎月一回ずつやって。ちょっとその下に
ね、本があるんだ。キノコの本はあれだよ。

ーキノコの本。

井出：そうだ、そうだ。それだ。この本を作ったの。

ー『阿武隈のきのこ』。

井出：『阿武隈のきのこ』っていうのね。これ、川内村、キノコで有名で、マツタケと
かいろんな物あるよねっていうふうなところだけども、でも実際ね、「アーカイブとして
どういう物を残せるの？」って考えた時に、何もなかった。だからキノコの勉強会をやり
ながら、この本を作ったのよ。
こういうことで地域を盛り立てていきましょうというようなですね。これが評価され
て、実は総務大臣賞を頂いた。それには僕とか井出寿一さんとか関わっていて、一緒に
やったの。金沢まで、金沢かな、石川県金沢まで全国大会の表彰式に呼ばれて行ってきま
した。実際、これはね、現地に確認に来るのよ、審査員が。審査員、確認に来て、審査
員、山に連れて行ったの。で、キノコ採らしたの。キノコあるでしょって。採ったキノコ
を戻ってきてから天ぷらにして食わした。もう決まり、みたいな（笑）。
そんなんでね、いろいろ、やっぱり 20 年近く東京にいて、そこから見てきた川内
村のよさであったり、そういったものを僕なりにその時に思っていたのが、少しずつ形に
していったっていうのがね、地域づくりの、していきたいっていう気持ちがね、地域づく
りの原動力になりましたよね。

ー村会議員になったりとか、あるいは川内創る会っていうのは何歳ごろ？ 何年ごろのお話ですか。始まったのは。

井出：僕が村会議員になったのが 48 だったかな。結構若かったんですよね。48 で村会議員。その時に。

－2003 年？
井出：うん。その時に商工会長もやってくれっていうふうな話で、いや、二つも三つもできないよってな話だったんだけども、いや、どうしてももう、前の会長さんが今度村会議員の議長になるから、俺にやってくれっていうふうに言われて。議長やろうが何やろうが二つやるってなかなか大変で、結構ね、自分の時間も取られてしまうので。だけども、しょうがなくて引き受けてですね。
その時、さっき言ったように三つのキーワードで、じゃあ地域づくりをしたい。そうすることによって地域の商工業者も元気になれるはずだというふうにして始まったんだけども、会員さんからはやっぱり批判もあったの。農業とかそういったもの、「商工会とは関係ないんじゃないの？」っていうような話になったんだけども、農商工連携っていうことをしていかないと、農業も商業も連携をしないと。分断しているものではなくて、お互いに関係性のあるものなので、農商工連携で。農業の人も商工会の会員になれるよっていうことで、実際になってもらってます、今。農家。

－珍しいですね。
井出：うん。農家も。法人で、緑里（みどり）っていう農業生産法人ありますよね。

－緑里（みどり）さん。
井出：あと、農業大学校もそうです。会員になっていただいて、グループ補助金とか、東電の賠償とか、そういったものも実際、商工会が窓口になって展開してます。

－じゃあ、この会は商工会を母体としてつくった会になるんですか。
井出：それはね、全く違うのよ。

－違うんですか。
井出：全く違う。仲間がいて、仲間と一緒に作ってやったやつなのね。

－これを作ったのは、いつごろ？
井出：震災の随分前だな。2000 年ごろだったかな。そうだな。

－40 の中ごろのお年ですかね？
井出：うん、そうだね。書いてなかったか？ この発行した日。

－これ自体は平成 17 年なんですよ。これは 2005 年。
井出：2005 年でしょ。そうしたら 2000 年ごろだな。これ、しばらく勉強会やってから作った物ですもんね。3 年間ご指導いただいたっていうから、平成 17、19 年まで行ってきた集大成としてだから、平成、そうすると、平成 10 年というと 2000 何年だよ？

－1990……、違う、これが 2001 年か。13 年。平成 13 ですよね。は、2001 年ですね。

井出：そうか。2001 年のころだな。始まったのが。そうですね。

－じゃあ、そこから議員さんと商工会長というのは続けておられて。それぞれいつごろまで？
井出：いまだにやってんのよ。

－どっちも？
井出：どっちも。どっちも。

－あれ？ 何年目？
井出：僕は。今回当選すると村会議員は 6 期目。長いよね。いろんなこと見てきた、もう。地方議員のやっぱりいい所、それから悪い所も含めて。

－両方やるのは大変だって言われながらも、一応議員さんも商工会長さんもするっていうのはやってこられて、旅館のお仕事もそれなりに？
井出：うん。やってる。俺、厨房でほとんどのお客さんの食事も、家族の食事も、全部俺が作る。もうね、嫌になっちゃうよね。たまにはおまえら自分で作れよ、みたいなっていうふうに思う時もありますが。

－これ以上は今お仕事はされないですか。肩書きというのはほかには？
井出：肩書き？ あるんだよ、まだ。観光協会の会長と、それから保護司をやってまして。保護司はね、これ、人の人生背負うことになるんで、すごい疲れますよ、やっぱり。例えば犯罪を犯した人のおうちの方とその調整をしたり、戻って来てもいいですかとかね、戻って来ないでどっかに住んでっていう。ただし、1 カ月に 1 回は僕の所に顔を出さなくちゃいけないじゃない。犯罪を犯した人は。で、いろいろ話をしたり。中にはね、僕よりも年上の人もいますからね。すごく、やっぱりね、人の人生背負うことになるんで、すごい疲れますよね、やっぱりね。それをいまだに続けてまして。ただ川内村みたいな所はあんまり犯罪者いないから。これ、今まで 3 件かな。3 件引き受けたことありますけども。

－それはいつごろからやられてらっしゃるんですか。
井出：2001 年。先輩保護士から、ちょっとやってくれよっていうふうに頼まれて。いや、できるかな、なんて。いや大丈夫だよ、できるから大丈夫だよって。押し付けちゃえばさ、押し付けちゃえばその人の仕事、終わりだから。「やりー」みたいな。1 週間ぐらい研修あるんだ、これ。いろいろね、研修があったりして。

－保護司になられて、ことし 20 年ぐらいだと思うんですけど、震災が真ん中にあった 3 件っていうのは時期的にはどれくらいの時期に？
井出：震災前。全部。

－全部で 3 件。見ておられたんですね。

井出：そう。でもね、やっぱりね、再犯するんだよな、そういう人って。しょうがないです、こればっかりは。特に再犯率が高いのは薬物と、それから性犯罪は再犯率が非常に高いですよね。僕は性犯罪は扱ったことなくて、窃盗と、窃盗と薬か。そんなもんです
ね。

２．震災時の行動

★大きかった地震の被害

－震災時ははどちらにいらっしゃいましたか。

井出：3 月、2011 年の 3 月 11 日。2011 年だよね。2011 年の 3 月は、その年の当初予算。3 月の定例議会があって、年度の当初予算の審議が終わった時でした。終わって議員控室に戻ってきて、その時にちょっと雑談をしてたんですね。そしたらぐらぐらぐらぐらぐらってきて、どうも強い揺れが続いていたので、ぱっと表を見たら電線がもう、こうじゃなくてこんなふうに揺れてたのね。これはひどいなって思って、僕はすぐに表に出た。そしたら地面がこういうふうに揺れてて、その時に僕は、あぶくま川内って温泉施設とかホテルとか、いわなの郷（さと）、ありますよね。あそこを運営する社長もやってたのよ、その時に。で、戻ってきて、車で戻ってきて、道すがら見たら瓦なんか落ちてて、お母さん方が表に出て、小さい子なんか抱っこしたりして、恐怖っていうかね。うちも、ここに来たら、うちの家内と娘が、ちょうどその時に娘は戻って来てたな。高校 2 年生だったので、いたんだな、ここに。そしたらうちの中の、「お父さん、うちの中もひどいよ」っていうことで、実はこういう所の壁がほとんど落ちてる。土壁だったのね。落ちて、もう僕はその時見た時に、もう旅館やめようと思ったの。こんなひどい状況ではもう再生できないなって思って。その足で、実はいわなの郷に行って、いわなの郷の被害状況を確認して。したら、いわなの郷は何ともなかった。体験交流館でみそ造りやってたの。いや、地震あったよね、みたいな話してて。おまえ何言ってんだよ、すぐうち帰って安否確認したりなんかしてくれっていうんで、帰っていただいて。今度は温泉施設のほうも相当被害を。被害っていうのは、お風呂の、露天風呂の床が割れたり、そんなふうになって甚大な被害も受けてました。売店なんかの物が倒れたりなんかして、そこは片付けてありましたけども、そんなんでね、厳しい状況になってるなっていうのは、戻ってきて、そうね、ひどかったね、あの時はね。地震の被害はあんまりないってよく言われるけども、川内村はそうでもなくて、かなりひどい被害を受けてる所もありましたね。

★受け入れ対応とその葛藤

－富岡町の人々を受け入れ、その後自分たちも避難することになったとのことですが、当時の茂さんの行動を教えてください。

井出：震災になってから、その日のうちだったかな。翌日、その日のうちだな。村長から電話がかかってきたの。富岡町から避難を受け入れるから、避難を受け入れる体制を取ってくれということで、いわなの郷、それから温泉施設、そういった所を避難を受け入るための状況を整理整頓してくれということで、温泉施設の売店にあった物とかなんか全部撤去して、片付けて、もう避難者の人が入れるように。あそこに個室三つあるんだよね。個室三つと大広間と、とにかくありとあらゆるスペースに人を入れてくれと。

で、入れました。商工会も実は会員さんの個人情報とかなんかがね、たくさん入ってる。事務所にはそういう情報がたくさんあるので、とにかく事務所には鍵をかける。そのほかの空いてるスペースは全部開放した。いわなの郷もそう。そういうようにして富岡町民を受け入れるための準備をしました。
僕は毎日、当時、あぶくま川内のマネージャーだった猪狩幸夫さんって人と僕と 2 人で、温泉施設で管理っていうかね、備品とかいろんな物の管理もしなくちゃいけないので、管理のためにいました。富岡町の住民方もそこにいて。そうこうしてるうちに、15 日、14 日だったかな、15 日だったかな。15 日の、15 日だな。避難を始めるということで、村長が避難をすると。防災行政無線、あの時に使ったか。使えたな。防災行政無線、使える所で使うっていうような形で、避難をすると。皆さん、元気でまた会いましょうっていうね、メッセージを残して避難を始めた。その時に、富岡町は埼玉の杉戸町と、杉戸町のね、何ていうんですかね、あれ。姉妹関係っていうか友好都市関係を結んでいたので、杉戸町から大型バスが、どうやって来たか僕には分からないんだけども、大型バス到着したの、温泉施設に。で、温泉施設から大型バスに乗り込んで、大型バスに 2 台だと思った。2 台でピストン輸送したんだよ。郡山と川内村をピストン輸送して、住民の人を全員郡山に運んだの。最後のバスが出た時に僕は鍵をかけて、温泉施設の鍵をかけて。家族はもう既に郡山に避難をしてましたので。ところが車のガソリンがないの。ガソリンがなくて、別な車から、うちにあった別な車からスポイトで、スポイトっていうか、あれでガソリンを移して、それで夜、郡山に向かって行くんですけども。途中、峠があるのよ。峠があって、都路と葛尾、都路と川内村の峠があって、やっぱりね、うしろ見ても、前見てもうしろ見ても真っ暗なんで何も見えないんだけども、そこに車を止めて、いや、もう絶対帰る、もう一度帰ってくるよっていうね。I'll be back. じゃないけども、やっぱりね、多くの人があそこの峠で川内村の方向を見て、やっぱりみんな涙してるんだよ。ふるさとをあとにするっていうね。なんでそうなったかというと、3 月 14 日の日に上空を今まで飛んでたヘリが一機も飛ばなくなった。

ー3 月 14 日。
井出：3 月 14 日に一機も飛ばなくなったの、上空。ほんで支援物資も入んなくなってきた。全く入んなくなってきた。川内村が避難をした最大の理由は、支援物資が滞ってきたから、このまんまでは食うことができないっていう判断の中で避難をしてったんですよ。確かにあの時の状況っていうのは、衛星電話が 1 台しかなかったの。役場の中に衛星電話 1 台。それは原子力保安委員って、昔ね、経済産業省の中に原子力安全保安院っていう組織があって、そこと電話でやりとりしてるんだけども、爆発したよねってね。大丈夫ですかって。大丈夫だから、大丈夫だから。大丈夫だっていう答えしかなかったのね。
当時。大丈夫だっていう中で、僕らは情報のない中で避難をした最大の、さっき言ったね、避難をした最大の理由は食料が入って来なくなったからなんです。川内村には、そこの川内小中学園にも避難をした。それから当時の、いま菊池製作所がある所、あそこにも避難をした。それぞれの集会所にもみんな避難してった。食い物がなくなってきたの、だんだん。ここでも、うちからも実はおにぎりの仕出しとか。仕出しじゃねえな、おにぎりの炊き出しとかなんかやってましたから。それでもやっぱり間に合わない。そんなんではね。富岡町民の人も一緒におにぎりを握ってくれたり、豚汁作ったり。あれ・これ市場ってあるでしょ、今。あそこの厨房で、こんなでっかい鍋で豚汁作っていたの。ところが、ある所からクレームが入ったの。おまえたちの所だけ温かい物を出すってどういうことだよって。おかしいと思わない？ 非常事態の時にはそういうことがあり得るんだな。で、それを言った本人が、俺らの所には食い物ねえから何

かよこせって、こう来たわけ。実際そこで、もう、じゃあ作るのをやめようっていう判断で、途中まで作ってた豚汁の、やめちゃったの。豚汁。当時、広域消防が避難をしてたんで、広域消防の人たちがそれを持って行って仕上げて、自分たちが食べるっていうね。そんなことがありましたね。短い間で、時系列でいろいろあるんだけども、『Fukushima 50』っていう映画、あるよね。それともう一つ、吉田千亜さんっていう方が書いた『孤塁』っていう、消防の人たちを中心に描いた本があるの。これ両方読むとね、原発の中と表で何があったかっていうのがよく分かる。これ、もし読む機会があったら読んでみるといいと思う。その時に、原発で火災があったんだな。その本にも書いてあるけども、原発の中で火災があって、僕もちょうど災害対策本部の村長室にたまたま居合わせたんですけども、その時に消防隊員の人が来て、増えてるんだよ。第一原発に消火活動に行きますっていう報告をするんだけども、その時に川内村の村長は広域市町村県組合のトップをやってたので、遠藤村長に報告に来るんだけども、もう、なんかね、こっちもね、鳥肌立つような、そういう緊張感の中で彼らは消防活動、要するに火災現場にこれから行きますっていうね。

やっぱりもうね、言葉で言うとなんか薄っぺらくなっちゃうけども、そういう緊張感の中で地域を守ろうとしているね、人たち。命がけで守ろうっていう、そういう人たちがいるっていうことはね、美化するんじゃないよって言われるかも分からないけども、美化とかなんかじゃなくて、そういう人たちがいて今があるっていうことをね、やっぱり僕らは感謝しなくちゃいけないなってね、思う。第二原発行くとね、当時あそこの電源喪失しかけたんだよね。だけども、あれはヘリでケーブルを運んできたわけ。新潟から運んだんだっけ？ あのケーブルな、ヘリで。たまたまあの時には土曜、日曜じゃなくて金曜日だったか。

－金曜日ですね。

井出：だよね。金曜日で作業員の人たちがいたのよ、たくさん。ヘリで電源ケーブル持ってきて。通常だと何日もかかる作業を、何時間かでやっちゃったんだよ。電源、こんな太い電源ケーブルをみんなで引っ張ったんだよな。引っ張って、いまだにコンクリの上に引っ張った跡が残ってる。その緊張する何十分かを映像に残してんだな。それを頼むとね、見せてくれるよ。もう本当にしびれるような時間の中で、第二原発を守ってった。あの時の所長が増田さんっていうね、所長さんなんだけども、実は彼は技術屋さんなの。技術屋だから第二原発が守られたっていう。もしそうじゃなくて電源喪失してたら、たぶん東日本は壊滅的な状況になっただろうって言われてんだな。反対の人はね、美化すんじゃねえよとかいろいろ言うんだけど、でもそればっかりではなくて、そうして守ろうっていう、思って、みんなで力を合わせたって、その結果がね、こういう今の、こういうことかなっていうね、思いますけどね。

★一人の帰村と揺れ動く気持ち

－茂さんが先に川内村へ戻って来たということを伺ったのですが。

井出：そうなんだよ。そう。4 月の 16 だったか 6 日だったか、ちょっと記憶揺らいじゃったんだけども、電話かかってきたの、僕の携帯に。泊まりたいんだけど、何とかなりませんかって。それは第一原発の作業ではなくて、実は広野町にあった火力発電所。津波で燃料タンクが壊滅的な状況になった。ぐちゃぐちゃになっちゃって。とりあえず火力を運転しなくちゃいけない。電力が足りないっていうことでね。で、実は電話がかかってきて、広野町の火力発電所の復旧作業に当たりたいんだけども、どこももう泊まる所がないから川内村に泊まりたいって言われたの。さっきも言ったように、うちはもう壁も落ちて、もうぐ

じゃぐじゃになって、うちもゆがんじゃってて、もうとにかく直さないといけないっていうね、そういう状況だったんだけども。でも僕は半分もうやめようと思っていたとこに電話がかかってきたの。でね、うそついたの、僕は。電話が、固定電話が通じないからできないってね。そしたら1週間後に固定電話つながっちゃったんだ。

ーなるほど。

井出：で、また電話かかってきて、井出さん、固定電話回復しているようなんですけど、回復したらお泊めできるんですよねって。お泊まりできるんですよねって言われて、んー、あー、えー、みたいな。それで実はね、その電話があったから僕は再開したのよ。郡山からうちの家族と子どもたちとみんなで来て、ここを片付けるんだけど、途中に検問所があるの。検問所あったのよ。そしたら検問所通るだけで、入っちゃいけない所にこれから行くんだよねっていう、そういう緊張感みたいなのがあって、思うように片付かないんだな。みんながみんなね、なんかぼーっとしてんだよね。ようやく何人か泊まれるように部屋を片付けをして、受け入れたの。そうね。3人とか4人とかしかお客さんはいなかったけども、毎日隣町の小野町とか船引に買い物行くんだけども、峠一つ越えると子どもたちが、小学校 1 年生が黄色い帽子被って集団登校してんだよ。それ見るたんびに毎日泣いてるわけよ。俺も孫がいたから。もう、なんかね、悲しくなっちゃって。悲しいのと、孫に申し訳ないことしたっていう、その両方があって。いや、もうあの光景見るたびにね、もう泣き虫になっちゃって。1日のうちで、いや、ここにいて頑張らなくちゃいけないっていう気持ちと、いや、もうやめて二次避難をした埼玉に。家族、埼玉に行ってたのね、二次避難で。埼玉行こうかなとかね、1日のうちに何度もこういうふうになるのよ。ここで頑張んなくちゃいけないっていう気持ちと、いや、もう家族の所へ行きたいなっていう気持ちと、こういうふうに揺れ動いてた。そうこうしているうちに女房と話をしてても、だんだんお父さんと話してても話かみ合わなくなってきたんだよねって言われて。これはまずいなと思って、女房が1年後に、私帰るからって言って、2012年の4月の12日、帰ってきてくれたの。孫連れて。一番最初に子どもいるからって言って、孫いるからって言って、ここを除染してもらったのよ。0.23以上ありましたからね、ここも。0.3とか、そのぐらいありましたんで。ただ、その時に、やっぱり学習っていうか、僕が自分で調べたんじゃなくて、その時に来てたのが京都大学、それから長崎大学。2012 年にはぼちぼち来てた。で、話をして聞いたら、いや茂さん、大丈夫だよ。お孫さんいても大丈夫、いても大丈夫だからって言われて、心を強くしましたね、その時はね。ただ水から、お水、地下水から放射線物質が出たら、僕はここを、川内村から出ようと思ってたの。もう水は命の源ですから。でも水からは出ないっていうのは、チェルノブイリもね、そうだけども、水からは出ないっていうのは分かっていたので、分かって。あとからね、知ったの。あとから知ったんだよ。そんなんでね、もう2011年、12年のころからは、ここは緊急時避難準備区域になったので、いてもいいよ。ただ、何かあったら自分で避難するんだよっていう地域になったの。ここはね。だけども、誰もいない。近くに爺ちゃんいたんだけど、爺ちゃんと婆ちゃん住んでたのね。まったく他人なんだけど、聞いたら、いや、俺もいたんだよって。だって電気ついてなかったよって言ったら、いちゃ悪いと思ったから電気のかさに、まわりに電気が漏れないようにこういうように囲いをして、息を潜めて暮らしてたって。何だよ、いたんだよ俺って。そんなことしなくてもって。

ーなるほど。

井出：そうなんだよ。2012 年、11 年の秋元美誉（よしたか）さんが、農家、たぶん知ってると思うけども「涙の米」って、ニュース 9 かなんかでやられましたよね。あの時に僕らの、この仲間が東京から来て、田植えをやろうって、やったんだよ、田植え。種まきして、苗育てて、田植えやったの。田植えやって、国からは、秋元美誉さんが田植えをやって、これをもし食べたら罰則規定だよってんで、新たに罰則規定を設けられたんだよ。ほんで、収穫できました。その米を全量、廃棄処分にしろって、県から。廃棄処分は土に埋めろって。収穫した物を土に埋めなさいって話。秋元美誉さんはトラクターでそれを土に埋めていくんだ。ガーッとやって。それ取ってさ、米取ってな。いや、米に申し訳ねえって言って泣くんだよ。百姓が米作って当たり前だろうって言ってな。で、その米を実はこっそり取って。食べないよ。こっそり取って、横浜国大に送った んだよ、友達が。検査してくれって。そうしたら ND だった。検出されませんっていって。そんなんで、そのやりとりを今度、県と秋元美誉さんがやりとりするんだけども、県のほうは翌年度の栽培を認めなかったんだな。試験栽培だよって言って。でも農業の再開の、この糸口を切り開いたのは 1 人の農家だよ。秋元美誉さんがやってった。2011 年はね、いろいろあった、本当に。12 年もいろいろあったけど。装甲車でしたからね、ここ。自衛隊の装甲車。中東なんかでさ、この大砲なんか付けて 走る装甲車あるじゃん。

ーキャタピラーの。

井出：そうそう。あれなんか、そこに、役場の所にあったりしてさ。僕もちょうどそのころから走り始めた。55 歳でしたんで、走り始めたの。ただ体重がもう 90 キロオーバーしてたんで、もう走れなかった。もう肉がぶよんぶよんして。で、ノルディックウォークを始めて。 それで体重をね、75 キロまで落としたの。落ちるわな。家族いねえんだもん。

ーその 75 キロまでって、どれぐらいの期間で？

井出：半年ぐらいか。これは簡単。食べる物は、だって俺は豆腐とワカメしか食ってねえもん。豆腐と ワカメ。お客さんにはご飯は出すけども、誰も、話し合いっても誰もいないんだもん、だって。豆腐とワカメ食って、朝ノルディックウォークね、して。どんどん体重が減ったんで、今度走ってみようかなって言って走って。結構走れるじゃん、みたいな。 当時はもうたばこはやめてたけど、震災直後に友達が酒飲んだついでにね、吸えよ吸えよ、みたいな。いいから吸えよ、みたいな。「そう？」みたいな。昔吸ってたんで、吸ったら今度ね、また思い出しちゃうんだよね、たばこってね。1 年ぐらいいたずらしたんだけども、でも走り始めて、またやめてね。いきなりだったな、俺な。いきなりサンシャインマラソン出たんだよ。完走しちゃってさ。フルマラソン。42.195 キロ。

ーすごい。

井出：6 時間かかったんだよ。

ーでも走りきるっていうのは。

井出：そう。そのあと調子こいて京都マラソン走ったの。京都マラソンは 5 時間 30 分だった。フルマラソン 3 回、それから東和のロードレースも。日本のボストンマラソンっていわれる、もう、こんな坂道こ

んなんでね。あそこをね、完走したの。もう今はそんなことやり過ぎちゃって、脊柱管狭窄症になったのよ。手術して、そしたら右足に、右足が不自由になっちゃって、今もう走れないんで、もっぱらノルディックウォークで犬と一緒に散歩してる。ときどき夢見るよ。すごい快走してる夢。気持ちよく走ってる。もう走れないけど。そんなことがあって、でもやっぱり川内優輝さんも 2013 年に来てくれて、その時に川内さんが、いや、大会やるんだったら協力するよっていうふうな約束を頂いたの。2013 年に川内優輝さん実際走ってくれて、川内優輝ロードができて。そのあとですよ。そのあとしばらく川内優輝さんが来てないの、川内村に。そのあと、川内優輝さんの所に、高等学校まで行って、観光協会の人間が行って、いや、こんなふうに思ってるんですけどもどうでしょうか、みたいなね。そんなことがあって、たまたま子どもが、小学生が川内村でマラソン大会ができるといいよねっていうようなのがあったのよ。それで村もマラソン大会やろうかって。最初はね、じゃあどこが担当すんだよ、みたいなね。かなりもめたけど。

ーまあまあ。

井出：もめたけどね、できるようになったの。そのあとトライアスロンがあったりね。今度は自転車のツールド福島もそうですけども、実はツールド川内、今月の 28 日に昼くらいのをやる予定だったの。ところが北海道で事故があったでしょ。逆走してきた車にはねられて亡くなってんだよな。そのあおりを受けて、安全対策が不十分だからって言われて、双葉署から NG 食らっちゃった。やっちゃ駄目って。
もう第一行政権の区長さん、井出寿一さんだから、井出寿一さんが地元で歓迎しますよっていうことで、段取り全部できてたの。ルートもできて、ボランティアでちゃんと警備員も付ける。それも全部できていたんだけども、富岡署が駄目だって言って。行って 1 時間も頭下げっぱなしでさ、お願いします、お願いしますってね、言ったんだけど、どうも頭コンコンチキでさ、駄目なのよ。だから、いや、サイクルスポーツ、地域の事情もあるけども、でもオーソドックスな基準っていうのはやっぱり決めてもらわないと、双葉では駄目だけどいわきでは OK だよ、みたいなね。実際あるのよ、これって。ちょっと話それたけど、そんなふうにね、自分が走り始めた理由っていうのも、実はさっき言った揺れ動いてる気持ち、そういったものと自分はどう向き合ってったらいいかっていうのも含めて、走り始めたっていうのは、格好よく言うと、そういうこと。

３．避難先と帰還後の状況

★子供達の将来と避難先への感謝

ー埼玉県など避難生活の経験をお聞かせください。

井出：そうね。実は郡山に避難をした時も、そこにうちのお姉ちゃんが郡山にいて家族でそこに転がり込んでんの。米は 1 俵だから 30 キロの袋を二つ持ってったのね。あと、おみそを持ってって転がり込んだ。なんで埼玉に避難したかっていうと、実は高校 2 年、当時高校 2 年生だった次男坊と次女がいたので、その進学をどうするかということで、実はその時に福島県の高校で総文があったんだね。そこに、どうしても 2 人とも思いがあるから、そこに参加したいっていうようなのがあったんだけども、でも将来的に考えてね、どうなのっていうような話をして。じゃあ埼玉に行こうっていうことになったの。埼玉の川越総合高校っていったかな。次女のほうは川越総合校高等学校に行った。次男坊は山梨の日本航空学園に行

ったの。野球をやってた。野球やって、ところがあそこってセミプロみたいな所で、とてもじゃないけどあそこの練習に付いて行けないっていうことになって、実は次男坊は吹奏楽部、中学校の時にね、吹奏楽部やってたの。だから、和太鼓のほうの、行くって言って、和太鼓をやるようになったんだよ。バットをバチに持ち替えたみたいな。そういう理由があって、埼玉のうちのお姉ちゃんの所に行ったんだけども、2番目の姉が埼玉にいて、一番長女が郡山にいて、たまたま埼玉のそのうちは一軒家なんだけども、そこは実は山梨の航空学園の中に防災ヘリの格納庫があるの。そこに旦那さんが整備士だったので、そこのヘリの整備をやるので、家族で山梨行ってたのよ。たまたま山梨の航空学園行ったのも実はそういうご縁があって、被災地の学生を受け入れますということで受け入れてもらって。そこの空き家になっている所に家族でお世話になったんですね。そこに長男も、それから長女も埼玉に一緒に、うちの家内と住んでいた。一緒に避難をするようになったんですね。よくしてもらいましたよ。埼玉の高等学校の先生も、ホールボディカウンターを受けにうちの次女が福島に戻って、ホールボディカウンターを受けたんですね。その時に大丈夫だったっていうことを聞いて、本当に泣いて喜んでくれたっていうね。次女に対する支援もすごく手厚い支援があって、制服とかそういった物も全部買わなくていいような段取りをしてくれたっていうね。
避難先で嫌な思いをされた人もたくさんいるようですが、嫌がらせされたりね。でも、うちはそういうことは一切なくて、よくしてもらいました。日本航空学園でも次男坊はものすごくよくしていただきましたね。感謝しかありませんね。

★震災後の復興に向けた井出さんと家族の取り組み

ー避難先からお一人で帰還された際の家族の反応をお聞かせください。

井出：そうだな。心配してましたね。「大丈夫？」って。でもね、こういう性格なんで、何とかやるから大丈夫だよっていうふうな。家族は家族で、長男も長女も自分たちの、ことでやっぱり精一杯のところもありましたから。ただ、そうね。家族は僕の心配もしてるけども、僕もやっぱり心配をしていて。一番心配したのは孫のことで、それが一番だったかな。孫が心配だったなっていう。あと、家族はそれなりにやってたので。長女は今パン屋。もともと長女はね、大学を出てから製菓製パン学校って学校入り直して、技術職になって、一番最初に浅野屋っていうパン屋に就職をして、そのあとドンクに行って、両方のレシピを持ってんのよ。だから、いろいろドンクのレシピのパンを作ったり、浅野屋のレシピのパンを作ったりっていうね。いろいろやってますね。

ー親子ですね。

井出：そうそう。財産だもんな。そんなふうにして、一切ね、川内村に来て川内村で店を開く、開きたくてやっていた時に震災にあって、その時にＪヴィレッジのアルパインローズにいたのよ、アルバイトしながら。西さんって、ご存じの。
サッカーのね、帯同シェフ。今、今度はラグビーの帯同シェフで行きましたけども、あの人の下でちょっとね、仕事をさせてもらってたのよ。そんで、そのあと藤沢に福島県のアンテナショップができたの。藤沢市に。商工会議所経由でそういう話が来て、僕は娘に「こういうのがあるけど、ちょっとアルバイトする？」って言ったら、じゃあやってみたいっていうことになって、実は川内村のシイタケとか、いろんな物をそこに卸させてもらって、やってたのね。そうこうしてるうちに、やっぱり娘も職人ですから、パン

の世界に戻りたいということで、戻ったのがドンクだったの。ドンクに行ったはいいけど、今度辞められなくなっちゃった。人がいないのよ、やっぱりドンクも。人手不足で辞めないでくれって言われて、3年ぐらい引き止められてたかな。戻って来て、たまたま事業再開補助金っていうのがあったので、そこはちょっとね、事業再開補助金っていうのは、その事業をやっていた人が再開をするための補助金なのよ。うちはパン屋やってないのよ。

－再開なんですね。

井出：再開だから。僕がこう言ったの。「もともと地域にあった事業を再開するのも、事業再開補助金のあれなんじゃねえの？」つって。そこはもう無理やりこじ開けて。それは手伝ってくれてた経済産業省のね、やっぱり優秀なメンバー、当時の中小企業庁の長官になった角野さんという方がいて、角野さんが地域にパン屋は1件ぐらいあるのは、これ必要だから、事業再開補助金、会長言ったとおりやりましょう、みたいな話で突き進んでいったのよ。そしたら見事に不採択。不採択になって、その理由を教えてくれないのよね。不採択になった理由を。あとから聞いたんだけど、川内村でパン屋なんかやったって採算ベースに合わないから、こんなのは不採択って、その担当者の思いだけで不採択になったのよ。不採択の理由が分かんないから、規模が大きいから駄目だったのかも分かんないよねっていうので規模を縮小したんだよね。縮小して、生産能力をぐっとちっちゃくしたの。2回目出したら採択になっちゃって、困ってんのよ、今。要するに少ない人間で生産できるような、そういう最初の考え方だったのに、そうじゃないものになってしまったので、やっぱりちょっと大変になったんだ。そば屋はね、前からやってたんですけども。そば屋もね、今から創業当時のおそば屋の日記を読むと、いや、面白いのよ。1日2人とかね。3人しか来てないの、お客さんが。

－震災前？

井出：震災前。よく耐えたよねって。ここがあったからね、旅館があってそば屋があったので、旅館の分の収益を向こうの赤字分に突っ込んでたっていうね、ところもありますけども、今もしかしたら逆転しかかってるかなっていうところですね。やっぱコロナの影響はね、ボクシングでいうとボディーブローのように効いてる。

－じわじわ来ますね。

井出：じわじわ来てる。もしかしたらもう立ち上がらんなくなるかも分かんねえな、これな。

４．これからに向けて

★持続可能な川内を作るために

―商工会議所の会長や村議会の議員をしていらっしゃいますが、今後どのようなことに取り組んでいきたいのか考えていらっしゃったら教えてください。

井出：そうね。来たな。少子化、高齢化ってよく枕詞のように言われるじゃないですか。なんか悪いような雰囲気でね、言われるんだけども、高齢化を止めることはできないけども、成熟するためには高齢化も

必要な部分があって。それはよしとしているわけではなくて、でも、そういうふうな部分をアーカイブに残してったり、次の人材を育てるための、要するに知恵袋として高齢者を。高齢者の方にね、どういうふうにそれを引き継いでいくかっていうことは僕は必要だと思っていて。
日本人だけではなくて外国人の人も含めて、例えば農業に携わる人が少ないんであれば農家の就農者として外国人労働者を受け入れていく。その時の指導は高齢者の人ができるわけじゃないですか。体は動かなくても技術は持ってるわけだから。そうしながら、やっぱりこの地域の農地であったり山であったり、こういったものを残していく。
なんで残さなくちゃいけないかというと、実はね、高齢化してきて人が、高齢化、少子化してきて人が少なくなってくる。そうしてくると産業廃棄物であったり、いろんな物が持ち込まれたり、そういうような、例えば養鶏、養豚、都会では嫌がられるような、作業がこういう所に集積されてくる可能性がある。そうすると川が汚染される。川の汚染されると下流域の水であったり、海産物であったり、そういった物に影響されるでしょう。そのために、やっぱり田んぼであったり、畑であったり、山であったり、そういった所に従事していく人、それからここが食料基地としてしっかり機能すること。それが要するに下流域に対する責任なんだけども。
でもね、話ちょっとそれちゃうんだけども、実は横浜市と山梨県の道志村って協定結んでるんだよ。山梨県の道志村に、横浜市の水道局が山を管理してるの。なんでだか分かる？ 自分たちの水資源を豊かにするために、山梨県の道志村に横浜市の水道局は事務所持ってんだよ。

ーなるほど。
井出：そう。その上流と下流域の流域連携っていうのは、僕はこれからとっても大切だと思ってんのよね。

ーそうですね。
井出：水は勝手に湧き出てきて流れて行くわけじゃないんだよ。山があって、山が豊かであるためには菌類が豊かでないと山は豊かになれない。だから、自分たちではできないが僕はそういうふうに農地、山こういったものをちゃんと管理できるシステムをこれから作っていかなくちゃいけないと思っている。それは海外からの人も呼んでこなくちゃいけないっていうね、ところがあります。
もう一つは、少子化をどう食い止めるかって、なかなかこれ、日本全国の人口減になってきてる。どこも人口増えてる所なんてないわけ。そうした時に「じゃあ、女の人に産んでもらえばいいじゃない？」ってね、これも無責任な話じゃん。
産める環境をつくっていく。わくわくするような子育てができる、そういう環境をここにつくる。自分たちでできないところもあるじゃない？ それはこれから F-REI（エフレイ）とか、そういったものがそれぞれの地域で F-REI の事業展開しますよって言ってる以上ね、そこはやっぱりそういったところに助けてもらいながら。
川内村は遠藤村長が始めてる認定子ども園がある。小中学園が義務教育学校としてある。村長はノーベル賞をもらえるような子どもを育てたいっていうね。それはマインドだよ。マインド。ノーベル賞なんか交通事故だから。あれもらえるかどうかなんてのは。だから、そういうものとして、やっぱり子どもたちに教育を。教育って人間が一番変わることのできるチャンスのある部分なんだよ。

ーそうですね。
井出：僕はね、大好きな先生がいて、宮城教育大学の学長だった林竹二先生っているんだけども、彼がこう言ったんだよな。学んだことのたった一つの証は変わることである。学ぶことは変わることであるって。そのこと自体が、やっぱり川内でそういったことが実現できる地域であること。これはとっても俺は大切だと思っていて、遠藤村長も言ってますけども、子育て支援こそが持続可能な地域づくりにつながるって、僕も全くそのとおりだと思う。持続可能であるためには子育て支援がしっかりできるかどうか、ここにかかってると思う。きみたちがね、大学出て自分たちの岐阜行ったり、群馬戻ったりね、神奈川行ったり。どこだっけ。

ー山形です。
井出：山形ね。山形行ったり。山形はとっても素晴らしい所なんで。そういうことよ。自分たちが戻って、そこの地域でしっかり暮らすこと。暮らすって派手じゃないのよ。土だから。風土の土。風は交流人口。そこに誰が降り立つかでもっても地域って変わってくる。例えば鈴木先生が川内村に、川内村いい所だよねって住んで、子どもも産んで、ここで子育てをしながら豊かさっていうのを、いや、僕はこんな幸せだし豊かだよってね、別に決して不便だっていうふうには感じないんだけどってね。 俺なんか便利だと思ってるから、ここは。魚釣りもできる、ちょっと山に行けばキノコ採りもできる、アウトドアだってできちゃうわけよ。正直こんな便利な所ないよ。ただ、物を売ってねえっていうだけだからね。物なんか今ね、アマゾンでひょいと、こう来るからね。

ーそうですね。
井出：その買うっていう充実感はないかも分かんないけども。やっぱりショップに行って見ながらね、買うというのも楽しみの一つだしね。だから、そういうことを思っています。それから、もう一つ。高齢化してくると、体が利かなくなってきます。要するに障害者予備軍なんです。きみたちも、僕も。そうしてくると、車を運転できなくなってきます。免許返納しなくちゃいけなくなってくる。じゃあ、ここにショップをつくるのっていうことではなくて、新たな公共交通機関を僕はつくりたいって思って勉強会を開いて、村にも二度ほど要望しました。村は「そんな急がなくていいんじゃない？」って言ってんのよ、正直。急がねえって、今やんなかったらできねえよって思うわけ。だから新たな公共交通機関っていうのは路線バスだけじゃないよね。違うよね。と俺は思って、いろんな在り方があると。例えば村がやったっていいんだよ。村が、1人の人がバスを運行するから8時から5時まででしょ。4人でワークシェアリングする。午前中の3時間 だけ誰かに、誰か次のシフトの人、ABCDとかね、決めといて。そうすると朝から晩までもしかしたらバスが運行できるんだよ、これ。こうやって黒字化した所があんのよ。 そうなの。路線バスで赤字だったけど、民間で 3 人で回すようになったら便利だよねって言って、乗ろうって言って、なってる。それは観光客にも使えるんだよ。

ー確かに。
井出：地域の人たちだけではなくて。ここって観光客の人、来にくいんだよ。観光客が郡山まで来ました。郡山からここに来るのに1日2便しかないバス、どうやってとっ捕まえるのみたいにね。

ー確かに、そうですね。
井出：だから、そういうことが実はできるような物。いま水素とかEVとかあるでしょ？ そういった物を使いながら燃料を極力安くしていくっていうね。そんなことも含めて考 えられたら、ここに暮らすっていうこともまんざら悪くはないなって。

ーそうですね。
井出：今ここからいわきの駅まで40分で行っちゃうの。福島まで僕は毎月一度、福島医 大に行くんだけども、1時間ちょっとで行っちゃうの。新しく道路がね、改良されたから福浪線使うとあっという間なんで。そんなふうに思っていて、新たな公共交通機関をやっぱり欲しいって思ってます。それが交流人口の拡大と、それから川内村の経済の活性化につながるっていうふうに思ってる。 川内村の持っているリソースっていうか資源っていうか山とか、そういったもの、もう少し見るっていうだけではなくて、そこに居ることが癒やされるような、そういう空間をつくっていくってことも僕は必要だと思っていて。 あとは始末のいい川内スタイルっていう暮らしをどういうふうに提供できるか。要するに電気はそんなに使わなくていい。オフグリッドでも水素を使った発電施設を持ったり、あとは太陽光と燃料電池、それからEV 車をうまく使って、完全オフグリッドの暮らしもここでできるような、そういう川内スタイルっていうのを簡単ではないと思うけども僕はつくり上げていきたいなっていうふうには思ってます。わくわくするでしょ？

ーそうですね。
井出：電気代、いらねえのよ。

ー確かに。
井出：で、やっぱり、あとは農地がちゃんとあって、生産者がしっかりしていて、川内村の野菜がジャスト・イン・タイムでテーブルに乗っかってくるっていうね。そういう健康であるっていうことも含めて。食農学類、頑張ってくれよ、きみら。

ーそうですね。ここ3人、食農学類ですね。
井出：だべ？

ーそうですね。
井出：頼もしいな。俺もちっちゃいながら畑やってんだけどさ、玉ネギ作ったり、ジャガイモ作ったり。簡単な物ばっかだよ。

ーいや、玉ネギ。ジャガイモはそうですね。どこでも育つんで、あれなんですけど。
井出：そうそう。ジャガイモは食料の救世主じゃない？

ーそうですね。確かに。炭水化物ですし。
井出：ジャガイモあったらな、大体足りちゃうもんな。

ーそうですね。そうです。生きられますからね。
井出：玉ネギとな、ジャガイモあるとさ。

ーそうですね。
井出：そうなんだよ。いや、食農学類に期待したいな。余計なこと、たくさんしゃべったけど。

ーいやいや。ありがたいお話をありがとうございます。お時間いただきまして、ありがとうございました。

【学生の感想】

井出茂さんへのインタビューを通して震災当時の過酷さや苦悩を知ることができ、震災と原発事故の恐ろしさを改めて思い知った。それに加えインタビューの中で井出茂さんの人としての暖かさと地域への溢れんばかりの熱意も感じ取ることができた。特に今後の川内について何か考えていることはあるかという質問に対し、多くの案が間髪入れずに出てきたのは川内への愛の強さの証明に他ならないと思う。今後私が地域活性の取組みをすることがあるときはそこが自分にゆかりのない場所でも茂さんのようなあたたかい心を持って行きたいと思う。

食農学類　１年　鈴木順斗

井出茂さんへのインタビューを通して、震災当時の状況や当時の行動、思いを知ることができた。また、川内村の抱えている問題を見つけるだけでなく、それを解決する案を具体的に考えていることやインタビュー中に出てきた「今やらなくちゃいつやるんだ」という言葉から、次の世代にも持続させることができる村を本気で作ろうという強い思いも知ることができた。井出茂さんの課題を放置せず解決策を考える姿勢を見習って、これからの学校生活や普段の生活にも取り入れていきたいと感じた。

食農学類　１年　馬渕友悟

今回のインタビューで私は、井出さん自身から見た震災時の状況や当時の思いを詳しく知ることができた。また、震災を経て大きく変わってしまった村の現状を受け止めながらもより良い村へ発展させようという未来への強い気持ちを感じることができた。インタビューで感じた井出さんの温かく優しい人柄と、川内村が今抱えている課題が何であるかを考え続けその解決策を見つけ出していく姿勢が強く印象に残った。インタビューで知ることができた井出さんの「課題を見つけてより良いものへと変えていく姿勢」を忘れずに、より良い社会になるために自分にできることを考えていきたい。

人間発達文化学類　１年　立石茉穂

今回のインタビューでは井出さんの震災と正面から向き合い過去を振り返る姿や前向きに今後を考える姿から意思の強さや情の深さを感じることができた。また私はインタビュー中に避難先の対応に対して「感謝しかない」という話をされたことが印象に残っている。震災の影響で多くの人が避難を余儀なくされ、避難先で辛い思いをした人も多くいる。そうした中でこの言葉からは井出さんの強い意志を感じることができ、これこそが今後に残していくべき大切な思いであると考えた。今後は私自身が井出さんから学んだ震災の記憶や考え方を大切に日々の学習に励むと共に、多くの人に今回のインタビューを通して感じ、学んだことを伝えていきたい。

食農学類　1年　田村真大